

# 「孝」に生きる女性たち

—「蠅のはなし」、「雉子のはなし」を手がかりとして—

三 成 清 香

## はじめに —ハーンと再話、そして女性—

ラフカディオ・ハーンは1890（明治23）年に40歳で来日し、54歳で亡くなるまでの14年間で日本で過ごした。当時の日本は近代教育が次々と取り入れられ、日本が他のアジア諸国に先駆けて近代国家の仲間入りを果たし、日清・日露戦争に向け強固な国家づくりに邁進している状況であった。その激動の時代に、主に教育者として日本に滞在しながら、執筆活動も行ったハーンは、その著作とともに現在でも注目を集めている。

『知られぬ日本の面影』*Glimpses of Unfamiliar Japan*（1894）から始まった彼の著作は、没後110年を経た現在でもなお読まれ続けられている。中でも彼が松江時代から晩年まで取り組んだ「再話活動」は他の外国人がなし得なかった業績であり、著作の中に点在する物語は、当時の西洋の読者に向け、彼の日本観を込めて語りなおされたものであるにも関わらず、現在多くの日本人にも懐かしみや驚きをもって受け入れられている。

ハーンの再話作品を一瞥すると、全体の物語数の中で女性が物語の中核を担う物語の割合が高いことに気付く。しかも明治も半ばを過ぎてからの活動であったにも関わらず、近代化以前の女性たちを多く描き出しているのである。なぜハーンは女性の物語を多く描いたのだろうか、しかも近代以前の女性たちにこだわったのだろうか。これは言い換えれば日本の古い物語が西洋の読者へ向けた物語として生まれ変わる過程で、どのような意義を持たされたのか、ハーンは物語の女性たちを以て西洋の読者に何を伝えようとしたのか、という疑問である。

明治民法の成立に向け、日本における女性の地位が殊更低められていったこの時代に、ハーンはあえて近代化以前の封建社会に生きた女性たちを多く扱った。本稿ではそれらの中から「蠅のはなし」と「雉子のはなし」を取り上げ、これらの作品の中に描かれる女性がどのような意義を持たされているのかを浮き彫りにする。

し」と「雉子のはなし」を取り上げ、これらの作品の中に描かれる女性がどのような意義を持たされているのかを浮き彫りにする。

## I. セツの手足と「孝」

ハーンの再話活動は松江時代から始まり、最晩年まで続く一つのライフワークであった。いうまでもなく再話作品は日本の古い物語がベースとなっているが、日本語を体系的に学ぶ機会が得られなかったハーンにとって、自らが物語の題材を仕入れることはできなかった。そして、その役割を担ったのが、妻セツであった。彼女は物語を収集し、「へるんさん言葉」と呼ばれる独特な日本語で彼に物語を聞かせ続けた。ハーンがセツに物語の大筋を暗記させ、彼女自身の言葉で語らせ、物語の展開についても議論した<sup>1</sup>ことは既によく知られていることであろう。したがって、ハーンの著作の中で日本に関するものは、再話作品に限らず、直接的あるいは間接的に、妻セツが与えた影響が非常に大きいことは周知の事実である。梶谷泰之は「今日、セツの功績をたたえる人は少ないが、よく夫を扶けた典型的出雲婦人としてセツはもっと称揚されねばならぬ<sup>2</sup>」とし、ハーンがセツと結婚したことは、日本での14年の輝かしい業績に結び付くものだと指摘している。実際、ハーンの著作の中で、多くの再話作品はもとより、日本に関するあらゆるものにセツが与えた影響は計り知れない。これは研究者のみならず、ハーン自身も認めている明白な事実である。つまり、ハーンにとってのセツとは、単にハウスキーパーとしての役割を担う妻ではなく、彼にとって、失われた左目とも言えるほど、彼の視野と可能性を広げたとと言えるのである。

ハーンとセツとの結婚には諸説あり、例えば二人の正式な結婚の時期や、二人にとっての西田千

太郎の役割などについては、長谷川洋二『小泉八雲の妻』（1990）や池橋達雄氏「ハーンとセツの結婚」（2009）などにおいて、論じられてきている。これらの中で、ハーンとセツの出会いは、1891年1月下旬から2月上旬であったとされている。この頃、流行性感冒にかかり長期間苦しんでいたハーンは、身体のみならず精神的にも追い込まれ、強度のノイローゼになっていた。その時に彼の身の回りの世話をするため、雇われたのがセツだったのである。そして、ハーンが抱いたセツの第一印象について、興味深い証言がある。

節子様の手足が華奢でなく、これは士族のお嬢様ではないと先生は大不機嫌で、私に向かってセツは百姓の娘だ、手足が太い、おツネさんは自分を欺す、士族でないと、度々の小言がありましたので、これには私も閉口致しまして種々弁解しましたが、先生はなかなか聞き入れませんでした。しかし士族の名家のお嬢さんに間違いありませんので、間もなく万事目出度く納まりました<sup>3</sup>。

ハーンは、女中として「サムライの家の娘」を紹介されたのだが、手も足も太く、農家の娘にしか見えないセツを前に、自分は騙されているのではないかと感じたのである。ハーンが思い描いていた士族の娘—サムライの由緒ある家の出身で、大切に育てられた美しい女性—とは、かけ離れた女性を前に、「士族ナイ」「私ダマス」「ノー」と抗議した<sup>4</sup>という。

だが、もちろんセツが士族の娘であることは偽りではない。彼女は1868年2月4日、小泉家の次女として生まれ、父親小泉湊は、かつて松江藩の三百石御番頭であった<sup>5</sup>。この小泉家において、家長小泉湊は、精気盛んな侍で、妻チエは14歳の時に嫁ぐまで30人もの奉公人に傳かれて育った<sup>6</sup>。まさに典型的な上級士族だったのである。また、セツの親戚を見れば、血縁的に多くの侍たちとつながっていたというのが以下のように指摘されている。

親戚と言えば、セツは事実上、出雲における高位の侍たちのすべてと、なんらかの血の

繋がりがあったと言える。というのも、小泉の祖父岩苔は、幕末に中老に進んだ乙部堪解由家から、小泉家に贅養子に入ったものであり、この乙部家の本家である乙部九郎兵衛家こそ、出雲の、いわゆる代々家老七家の中でも、大橋家と並んで最も有力な家であった。（中略）

その上、セツの母の実家である塩見家も時に家老、時に中老を務める、いわゆる「不定家老」の家柄ではあったが、江戸中期の宝暦年間から幕末に至るまで、松江城三の丸御殿の前に、乙部本家に劣らぬ広大な屋敷を構えた有力な家で、セツの祖父に当たる塩見増右衛門こそ、その壮烈な諫死で出雲の歴史を飾った名家老であった<sup>7</sup>。

このように、セツは平凡な士族の娘ではなく、サムライの中のサムライの血を受け継ぐ女性であったことは明白な事実なのである。それでは、なぜ小泉家の次女セツの手足が太くならざるを得なかったのか。それはこれまでも指摘されてきているように、武士階級の没落に大きな原因がある。江戸期から明治期へと時代が変わり、その大きな社会の変動に、松江の士族たちは適応できなくなっていくたのである。これについて、田部隆次の言及を見てみよう。

維新後、出雲には奮發家と云ふ新熟語が永く流行した。發奮して事業を起す人の事であった。夫人の父も奮發家の一人となつて織物の工場を起したが、士族の商法が多く陥るべき運命に陥つて失敗した。名家の零落は悲惨である<sup>8</sup>。

このように、新しい時代の中で必死に適応しようとした小泉湊であったが、それは空しくも失敗に終わってしまったのである。このような流れを受け、セツの手足は太くなっていった。言い換えれば、彼女のそれは、貧しさを極めた家族への「孝」の気持ちを示すものであったのである。

ここでいう「孝」とは、行為として当然示すべき思想である。つまり、武士が朱子学に基づき忠と共に重要視した「孝」の概念は、名家小泉家に

生まれ、士族稲垣家で育ったセツにとって、ごく自然なものとして受け入れられていたと考えられる。たとえ没落し、その栄華はもはや見る影もなく、生きることに奔走しなければならない状況であつたにせよ、まさに士族の血としてセツの中に流れていた感情であつたに違いない。

そして、彼女の孝が向けられた対象は、3人の親と養祖父である。というのは、上士小泉家に生を受けたセツは、生前から稲垣家に養子に出されることが決まっており、生後間もなく稲垣家へもられたからである。いずれも士族ではあるが、両家とも、明治に入っては没落、零落の道を辿っていた。何事にも努力を惜まず、気の強いセツは、学校を下ろされた後、学びたい気持ちを嘔み殺しながら<sup>9</sup>、稲垣家の家計を機織で支えた。こうして、彼女の腕や足は、否応なく太くなっていったのである。

さらに、セツの初婚の相手である為二は、その貧窮に耐え切れず、大阪へ出奔してしまった。それを期に、婚姻関係の解消と小泉家への復籍手続きを申請した。そして稲垣家の両親の扶養の他に、息絶え絶えの小泉家の家系を繋ぐという孝の荷をも背負わなければならなかった<sup>10</sup>のである。

だが、別の見方をすれば、この「貧しさ」こそ、彼らを結びつける一つの要素となったと言える。

又たヘルン氏の妾は南田町稲垣某の養女にて、其実家は小泉某なるが、小泉方は追々打ちつぶれて母親は乞食とまでに至りしが、此の妾といふは至って孝心にて養父方へは勿論、実母へも己れの欲をそいで与ふる等の心体を賞して、ヘルン氏より一五円の金を与へ、殿町に家を借り受け道具等をも与へ爾来は米をも与ふることとなせりといふ<sup>11</sup>。

この文面からも分かるように、セツの実母を始め彼女を囲むすべての人々は困窮を極めていた。そして、セツを唯一の頼りとしていたのである。ここまで貧しかったからこそ、セツは言葉も通じない西洋人の住込み女中になることを厭わなかった、否、そうせざるを得なかったのである。上記のように、新聞に度々取り上げられる程注目を浴びてしまうだけでなく、当時のことであるから

<sup>ラシャメン</sup>「洋妾」と後ろ指を指されることもあった。だが、それでもセツは天性の思い切りのよさと、家族への「孝」の気持ちから、この道を選んだのである。

そして、ハーンは女中として懸命に働くセツの姿に、かなり早い段階で特別な感情を抱くことになった。同僚西田千太郎から聞かされた小泉チエの困窮ぶりに、ハーンが救済の手を差し伸べるのは当然の成り行きであつた。この記事が書かれた6月中旬頃には、セツと同居をしながらも別の女中を雇い入っていたことから、ハーンにとってのセツはもはや女中ではなく、「妻」だったのである。ここで、彼らの結婚について梶谷泰之氏の指摘を参照したい。

ハーンはセツが初婚に失敗した不幸な士族の孝行娘であることを西田千太郎教頭から紹介され、自分の生母ローザのあわれな場合も思い合わせて同情し、実の弟のごとく信頼していた西田教頭の推薦を信じて結婚したというのが実情であると解したい<sup>12</sup>。

このように、サムライの娘セツが農家の娘のような外見をしていることは、近代化の犠牲者とも言える彼女の身の上からくるものであることを知ったハーンは、セツの手足を以て日本の「孝」を理解した。さらに言えば、単に作られた日本女性のイメージからではなく、現実を何とか生き抜こうとするセツの健気さから、彼は幸運にも日本女性の本当の美しさに出会うことができたのである。

事実、ハーンは彼女の手足の太さを後々まで、セツの親孝行の証拠としてあげるようになった。そして、決して細身ではない若かりし頃のセツに向かって「私マイリットルファットヘンの小さい肥った雌鶏」「小餅のママ<sup>13</sup>」などと呼び、小さく弱く、愛おしいものとして熱愛するようになるのである。

## Ⅱ. 男子生徒たちに見た「孝」

ハーンは14年の日本滞在のうち神戸時代を除くおよそ12年間を英語教師として過ごした。そこで出会った多くの男子学生の中に日本の思想を見出そうとし、易しい英語で英作文を書かせ続け



たのはよく知られた話である。改めて言うまでもないが、ハーンが日本において多く交際した日本人はほとんどが男性（職場の人間か学生）であった。そして、とりわけ松江時代に触れ合った学生たちの中からは、古き日本の社会制度に生きる日本人の姿を見ることができた。

ここでは、まずハーンが書かせた英作文や学生たちとの会話から、ハーンが日本の「孝」をどのように知り得たのかについて見てみたい。

#### ヨーロッパと日本の習慣

……私たちがとても不思議に思うのは、ヨーロッパでは全ての妻が両親よりも夫をより愛することだ。日本では夫よりも両親をより愛さない妻はいない。

またヨーロッパ人は妻と道を歩く。私たちは八幡のお祭りのとき以外はそれを断固拒む。

日本女性は男性によって女中のように扱われ、一方ヨーロッパの女性は主人のように尊敬される。私はこれらの習慣はどちらも悪いと思う。

私たちはヨーロッパ女性を待遇するのは非常に面倒なことだと思う。そして私たちはなぜヨーロッパでそれほどまでに女性が尊敬されるのか分からない<sup>14</sup>。

この文章は、ハーンが松江尋常中学校で英語教師として働いていた時に、学生に書かせたものの紹介で、「英語教師の日記から」（『知られぬ日本の面影』）に収められている。これは実際の英作文の抜粋<sup>15</sup>で、かなり表現が抑えられているが、ここからハーンの伝えたかった日本の孝を読み取ることができよう。男性が女性と一緒に外を歩かないこと、それはすなわち公衆の面前ではそれが適切な行為ではないと思われる社会である。そして、女性が僕のように扱われるのが当然である日本社会に生きる男子生徒にとって、女性が男性に手厚く扱われる社会は想像もつかないことであった。そして何よりも、彼が「不思議に思う」のは、「日本では夫よりも両親をより愛さない妻はいない」にも関わらず、ヨーロッパでは「ヨーロッパでは全ての妻が両親よりも夫をより愛する」らし

いということだ。これは当時「孝」の考えに則り成立していた結婚という一つの秩序に反する行為であった。それゆえ、それが当然と罷り通るヨーロッパという社会を、この若者が理解できないのは当然のことだろう。そしてこの英作文を見たヨーロッパの人々は、これとはまさに反対の意味で違和感を覚えることになる。

さらに、「英語教師の日記から」に記された、学生との会話を見てみよう。

授業中において、外国の諸事情に関する会話が同じようにおもしろく、啓発されることがたびたびある。

「先生、もしあるヨーロッパ人が、彼のお父さんと奥さんと一緒に海に落ちたとして、そして彼だけが唯一泳げる人だとしたら、彼は彼の妻を最初に助けると言われたことがあります。本当ですか。」

「たぶん、そうでしょうね。」と私は答えた。

「でも、なぜですか。」

「一つの理由は、ヨーロッパの人々は弱者を第一に助けるのが男性の義務だと考えているからです。特に、女性や子どもたちだね。」

「そして、ヨーロッパの人々は彼の両親よりも妻を愛するのですか。」

「いつもそうとは限らないが、たいてい、おそらく、そうだろうね。」

「なぜ、先生、私たちの考えによれば、それは非常に不道徳です<sup>16</sup>。」

このように、まだあどけなさの残る中学生たちの素朴でまっすぐな発言の中に当時の日本人の思想を見ることができる。そして、この会話からハーンは面白みと同時に、「孝」を第一に考える人々の存在を認識し、「suggestive（啓発）」されたのである。

女性が「弱者」として力を持つ社会、そして男女の愛は何よりも優先され、その愛に基づいて物事が進んでいく社会、それが西洋であった。そして、そのような社会に生きる人々には到底想像もできない社会をハーンは松江の地で学生の中に見出した。

ここで注目したいのは、ハーンが学校で触れ

合った学生たちは皆男子でありハーンは男の中に「孝」を見たということである。新日本を担うことになる学生たちが、孝への確固たる信念を持っているのを英作文や会話で痛切に感じたはずの彼が、物語の再話ではその任務を多くの女性に負わせているのである。

これを踏まえ、次節からは明治以前の社会に生きた女性の姿をハーンがいかに再話作品の中に描き出していったかに迫る。取り上げる作品は「蠅のはなし」と「雉子のはなし」の二作品で、女性を中心として展開されるプロットから、そこに描かれる女性たちと日本社会に存在する「孝」との関係性を考察する。いずれの作品も「死んだ親への孝行」がテーマとなっており、これは一見近代化を推し進める新日本の流れとは逆行するような内容のようにも受け取れる。だが、彼が数ある多くの古い話の中から選び抜いたこれらの作品からは、当時の西洋諸国へ向け発信すべき「日本」が、女性を以て示されていることが読み取れるのである。

### Ⅲ. 孝への執念—「蠅のはなし」—

「蠅のはなし」*Story of a Fly* は『新著聞集』の「亡魂蠅となる」を基としたハーンの再話作品で『骨董』*Kotto* (1902) に収められている。『骨董』にあるほとんどの作品と同じように、「蠅のはなし」も『怪談』*Kwaidan* (1904) にある作品のように広く知られ注目されていない。＜玉＞という女中が親に孝を尽して間もなく亡くなり、蠅に姿を変え主人の元へ幾度となく帰り、自らの弔いを託すというのがそのあらすじで、ほんの5頁にも満たない作品である。しかしこの短い作品からハーンの女性観、とりわけ明治以前の社会に生き、「孝」を何よりも重んじた女性の姿を如実に読み取ることができる。さらに、そこには語り手としてのセツの影も映し出されているのである。

ハーンの再話作品を読み解く前に、原典である『新著聞集』の「亡魂蠅となる」から見てみよう。以下がそのあらすじである。

飾屋の＜九兵衛＞の下女で＜玉＞という女がいた。四、五年間も勤めていたがほとんど衣類を持っていなかったで、＜九兵衛＞は気がかりで尋ねると、＜玉＞は幼いころに亡くなった両親を弔う

ため、節約に尽くし、百目の銀を用意したと言う。＜九兵衛＞はその姿に感心した。＜玉＞は供養に必要な銀七十目を寺へ支払い、その残りを＜九兵衛＞の妻へ預けた。＜玉＞はその年の冬から患い始め、元禄十五年正月十一日に亡くなってしまう。二月へ入り、とても寒い日に非常に大きい蠅が一匹、九兵衛夫婦の周りを飛び回るようになった。＜九兵衛＞はそれを捕えて、遠くへ逃がしたが、二日後に戻ってきた。次は高瀬川付近へ放したが、また帰ってきた。＜九兵衛＞の妾や下女たちは、「これは＜玉＞の亡魂ではないか」と噂するようになり、彼もそのように疑い、ためしに、羽先を少し切って遠くへ放してみると、また帰ってきた。あまりに不思議であるので、今度は体に紅を塗って放したが、その印が消えることなく帰ってきたので、夫婦共々あきれかえって、色々と思いを巡らした。そして以前預けられた銀の事を思い出し、それに執着しているのか、あるいは供養をしてもらいたいのかと考えた。＜玉＞の＜伯母＞は、仏の道には無関心だと日頃聞いていたので、＜玉＞のために二つの寺へ銀を預け、供養してもらうことにした。すると、今まで飛びまわっていた蠅が急に目の前で自滅したので、みな一同におどろき、それを箱に入れ、共に施餓鬼を行った。そして山の上へ葬り卒塔婆も立て丁寧に供養をしたが、翌日、塔婆の際に深く細い穴があり、不思議に思い掘り返すと、昨日埋めた蠅がいなくなっていた。僧侶たちは無事にあの世へ行ったのだと話し合った。それいらい、蠅が＜九兵衛＞の元へ来ることはなかった。

#### 1. 飛び回る「蠅」というモチーフ

ハーンが再話する手順として、まず日本に伝わる多くの物語の大まかな流れをセツに話させ、それが再話するに足る物語であると判断した場合にのみ、その詳細についてさらに語らせたというのは既によく知られた話であろう。セツは再話の作業について、以下のように振り返っている。

私が昔話をヘルンにいたします時には、いつも始めにその話の筋を大体申します。面白いとなると、その筋を書いておきます。それから委しく話せと申します。それから幾度となく話させます。私が本を見ながら話します

と、「本を見る、いけません。ただあなたの話、あなたの言葉、あなたの考えでなければいけません」と申します故、自分の物にしてしまっていなければなりませんから、夢にまで見るようになって参りました<sup>17</sup>。

このように、ハーンは再話する際、セツによって語られる物語が再話できるものかどうか取捨選択していた。それではこの「亡魂蠅となる」の場合、そのどの部分が彼の琴線に触れたのだろうか。

この物語から受ける最初の印象は、亡くなった親へ懸命に孝を尽そうとする若い娘と、彼女が死後に乗り移る蠅のしつこさであろう。親への孝をやっと果たした矢先に、命を絶やしてしまう不幸な娘が、どういうわけか人を煩わせる蠅に魂を移し、人々に自分の願いを伝えようとする。これが、例えば可憐に飛び回る蝶であったり、はかなく光を灯す蛍であったりするのであれば、少女の魂を容易く連想させるのであるが、彼女は蠅になるのである。しかもハーンは蠅を蝶や蛍に書きかえることはしていない。あくまでも「蠅のはなし」として再び描き出すのである。

ここで、ハーンが蠅に見出した意義について考えてみたい。＜九兵衛＞夫婦が「ひときは大なる蠅」を「うるさく覚へ」何度も外へ放すというこの行為の中にハーンが見たもの、それは、蠅一すなわち＜玉＞の中にある「孝行への執念」だったのではないだろうか。

＜玉＞は4、5年も＜九兵衛＞のところで働き報酬を受けながらも主人を心配させるほど着物を買わず、両親の位牌を立て、法事を営むべく一心不乱に自らの生活を切り詰めていた少女であった。その彼女が蠅となり、放されては戻り、放されては戻ったその忍耐強さとしつこさは、自分を何としてでも正式に弔ってほしいという願いからであった。そしてそれは自らが浄土へ行きたいという、いわば自らの幸福のためではなく、死後の世界で両親への再会を果たしたかったからだと考えることができよう。あるいは、自分が行った供養によって、両親が無事来世で過ごしているかということを目見たいという気持ちからだったかもしれない。いずれにせよ、彼女の生前の行動から考えて、＜玉＞という少女は、両親への思いの

外に何か強い希望や意志やらがあったわけではなく、ただ自分の存在の価値を両親へ置いていたと考えられる。そしてこのような女性の姿は、ハーンが日本で見出した一つの女性像と一致する。

他人のためだけに働き、他人のためだけに思い、他人のためだけに生きる女、限りない愛情限りなく無私の心を持ち、犠牲を厭わず、返礼を求めない、そんな女だ。(中略)我がままとはいっさい無縁で、人を悪くおもうことのおよそできない女、生まれ育った社会を離れては生きてゆけないほど善良な女。(中略)こうした女性は声高に讃められることもなく、静かに愛され、見習われた<sup>18</sup>。

すなわち、＜玉＞にとっての幸福は唯一の親に孝を尽すという義務であり、その義務を全うするためには人に疎まれる蠅となり、何度も人々にまわりつく執念で両親への思いを果たそうとしたのである。

「亡魂蠅となる」は、＜玉＞という健気な少女と蠅という、一見不自然な組み合わせながらも、そこに見える女性の一途さをハーンに見せた。そしてハーンはこの物語を「蠅のはなし」として蘇らせるに至ったのである。

## 2. しとやかさの加筆

それではここから、ハーンが再話した「蠅のはなし」を見ていこう。まず主人公である＜玉＞がどのように描き直されているかに注目する必要があるだろう。前述の「孝」への思いに加え、原典には描かれていない「女性らしさ」を読み取ることができる。それは、＜九兵衛＞が＜玉＞に着物を持っていないことについて尋ねる場面からである。まずは原典から見てみよう。

四、五ヶ年も奉公つとめしに、しかへ衣類など持たさりければ、主人もころにくゝおもひ、ある時、尋しに、されば、幼年のころ、父母ともにはかなく成けるが、我身より外、跡弔ふべき人もなければ、此辺なる常楽寺に位牌を立て、忌日ごとに供養をなしたき志願有て、何事も心にまかせずくらし候ひしが、最早、百目ほどの銀を、用意せしと申ければ、



主人も、下賤の身として、奇特なる志かなとて随喜し……<sup>19</sup>

このように、4、5年勤めている＜玉＞が十分な着物を持っていないことについて、＜九兵衛＞が気がかりに思い、その件について尋ねると、＜玉＞は幼い頃に両親を失い、弔う者が自分以外いないため、両親の供養のために資金を貯めていたと話すに留まっている。そして、既に十分な銀を用意したと聞き、＜九兵衛＞は身分の低い少女の心がけを喜ばしく思っている。

一方、ハーンの再話では以下のようにになっている。

しかし、玉は他の少女のように美しい着物を着ようとしなかった。そして休暇になると美しい着物を持っているにも関わらず、いつも仕事着を着て出かけるのだった。約五年九兵衛の所で勤めてからのこと、ある日九兵衛は、どうしてきれいに着飾ろうと努めないのかと彼女に尋ねた。

玉はその質問に込められた非難に顔を赤らめて、うやうやしくこう答えた。

『私の両親が亡くなった時、私はまだ小さい子どもでした。しかし他に子どもがいませんでしたから、二人のために法要を営むことが私の義務になりました。当時はそうするだけの資金を蓄えることができませんでした。しかしそれに必要な金を儲けることができたなら、すぐに二人の位牌を、常楽寺に置いてもらい、法要を営んでもらおうと決心しました。それでその決心を果たすために、お金と着物とを節約しようと努めました。——ご主人様が私の怠惰さにお気づきになる程ですから、おそらくあまりに儉約しすぎてきたのでしよう。しかし、その目的のために既に約銀百匁の貯蓄ができました。ですから、今後はご主人様の前に身ざれいにしてお目にかかるようにいたします。これまでの怠惰と失礼をどうかお許しくださいますよう、お願い申し上げます。』

九兵衛はこの率直な告白に心を打たれた。そして、少女に親切に話しかけた。——今後

どのような着物でも好きなようにすればいいのだと請け合い、そしてその親孝行を褒めた<sup>20</sup>。

(下線は筆者)

このように、原典ではわずか5行足らずの場面が、ハーンの再話ではかなり詳しく描写されているのである。ここでの明白な違いは、2つある。一つ目は、原典において二人の会話がかなり淡々と行われているのに対し、再話では＜玉＞の心理描写、すなわち＜玉＞が＜九兵衛＞の質問の中に「非難」が含まれていると捉え、「顔を赤らめ」ながら「うやうやしく」答えたという、心の動きが示されていることである。＜九兵衛＞の家で勤める少女＜玉＞にとって、主人である＜九兵衛＞はおそらく最も身近な男性であったことだろう。ここで、その＜妻＞ではなく＜九兵衛＞から衣服の指摘を受けることは、年頃の少女にとって、顔が赤くなる恥ずかしいことであった。原典の＜玉＞は、自分が着物に無頓着であることについて、確固たる理由として「孝」を主張しているのに対し、再話の＜玉＞からは少女の羞恥心が描かれることで「かわいらしさ」、「少女らしさ」が感じられる。

さらに、＜玉＞が主人である＜九兵衛＞に「約束」をし「許し」を請うという場面が新たに加筆されたことにも注目しておきたい。＜玉＞は「今後はご主人様の前に身ざれいにしてお目にかかるようにいたします」と約束し、「これまでの怠惰と失礼をどうかお許しくださいますよう、お願い申し上げます。」と許しを請うのである。つまり、長年両親のために着物を買わなかった＜玉＞は、今後＜九兵衛＞のために自らを着飾ることを約束するのである。ここにあるしとやかさに見える「自己」のなさ、前述したハーンの女性観に通ずるところである。自らの意志云々ではなく、常に周囲のために自己を存在させようとする女性こそ、西洋に向け発信された「蠅のはなし」の主人公としてふさわしいと考えていたのだろう。

### 3. ＜伯母＞の不在

ここで、＜玉＞以外の人物の変化も見てみたい。「亡魂蠅となる」が「蠅のはなし」になる過程で、登場人物が簡潔化され、それに伴って＜玉＞、＜九兵衛＞、そしてその＜妻＞の行為も変化してい

る。この点について詳しく読み解いていこう。

まず、最も分かりやすい物語の変化は、ハーンの「蠅のはなし」には＜伯母＞の存在が欠けているという点である。この登場人物の簡略化が意味するものは何なのだろうか。

まず、原典での＜伯母＞の存在を見てみよう。

かくて、玉、過し冬のころより惱めるが、病もおもりければ、宇治の辺に、伯母なりし者の方へ引こし、医療を加へしかども、叶て、元禄十五年正月十一日に身まかりし、主人のもとへも、此よし通じければ、不便の事におもひし然るに……<sup>21</sup>

ここから分かるのは、＜九兵衛＞のところで女中として働いている＜玉＞が、病に臥した時に身を寄せた「身内」としての＜伯母＞の存在である。＜玉＞は幼い頃に両親を亡くし、また一人娘であったことから、頼れる身内は親戚、すなわちこの＜伯母＞以外にいなかったのである。一方、再話の方にはこの存在は描かれていない。

ところが、翌年の冬の初めに玉は急に病気になった。そしてしばらく患ったあげく、元禄十五年(1702年)正月の1日に死んだ。九兵衛と妻とはその死を非常に悲しんだ<sup>22</sup>。

このように、＜玉＞がどこで闘病し、亡くなってしまったのかについては言及されていないのである。この後も＜伯母＞の存在が一切描かれていないことから、読者は当然彼女が＜九兵衛＞の家で患い、亡くなったと読み取ることになる。また、＜九兵衛＞と＜妻＞が彼女の死を非常に悲しんだことから、あるいは彼女が彼らから看病を受けたとの印象すら与える可能性もある。

そして、もう一つの＜伯母＞の役割は、「信仰心の薄い」、すなわち＜玉＞が信頼を寄せない人物としての存在である。

今は夫婦の者も興さめて、とやかく思ひはかるに、とやかく思ひはかるに、日外あづけし銀の事をおもひ出し、是に執着せしものか、亦は追善なとうけんが為か、兎に角、不便に

おもひ、いかゝせんと思慮するに、伯母は、後世の道には疎き者の様に、常々語りしかば、その者の為なれば、右の銀をは、貴き寺へも上げ、回向をこひ、然るへしとて、……<sup>23</sup>

このように、死後、蠅となって＜九兵衛＞と＜妻＞の周りを飛び回っていた＜玉＞について、夫婦が思慮する場面がある。「前に預かっていた銀で、法要してほしいのかしら。確か、玉は彼女の伯母さんが信仰心の薄い人だといつも語っていた。それでは、この銀を寺に持って行き、法要を営んでもらうことにしよう」と彼らは考えるのである。

さらに、この点について更に考えれば、＜玉＞が100匁の金を持っていて、そのうち70匁を両親の供養のために寺へ支払ったにも関わらず、残りの30匁を＜妻＞へ預けておいたという以下の部分にも納得がいく。

かの寺へ、二霊の位牌をたて、資堂料とて、銀七十目おさめぬ、残りし銀をは、主人の妻にあつけ置きし……<sup>24</sup>

つまり、＜玉＞は日ごろから＜伯母＞へ信頼を置いておらず、自分の財産を雇い主である＜妻＞へ預けておいたということになる。「後世の道には疎き者」であった＜伯母＞であるから、今の生活のために＜玉＞の蓄えを当てにしていたとも考えられる。いずれにせよ、両親の供養のために身なりに構わず儉約し、孝を尽そうとする彼女とは価値観が非常に異なる人物なのである。

一方、再話の方でも同じように、＜玉＞が＜妻＞へ30匁を預ける以下の場面がある。

貯金していたお金のうち、このようにして70匁を費やした。そして残り30匁は主人の妻に預っておいて下さいと頼んだ<sup>25</sup>。

このように、理由もなく＜玉＞は＜妻＞へ残りの全財産を預けるという流れになっているのである。この＜伯母＞の不在からはハーンのどのような意図が読み取れるのだろうか。

まず一つは、信仰心の薄い＜伯母＞の存在、そしてそれによる＜玉＞の身の上における不調和と



いった部分を排除することで、＜玉＞から彼女の両親への孝の気持ちとそれに基づく行為へより焦点が絞られるという効果があるだろう。すなわち、両親を失った＜玉＞は他に頼る所のない天涯孤独の身でありながら、それでもなお、亡くなった両親への思いを失わず、自らのことを顧みず儉約し続ける、健気な少女として描かれる。そこに親戚である＜伯母＞の存在は不要なのである。

そして、親戚である＜伯母＞の排除は、＜九兵衛＞と＜妻＞と＜玉＞との距離をより親密なものにしている。前述の通り＜玉＞が病に倒れた際、原典のように＜伯母＞の元へ送り返すという件を残すと、＜玉＞は＜九兵衛＞夫婦にとって一人の労働者に過ぎない存在となる。しかし、ハーンはその点について描写しないことで、＜玉＞を＜九兵衛＞夫婦により近い存在、言い換えれば主従関係を越えた特別な存在として描きだしたのである。さらに、＜玉＞が特別な理由もなく全財産を＜妻＞に預けることも、ここでは単に財産を預けることではなく、彼女自身の死後をも託すことにつながっている。そして「玉は九兵衛夫婦に親切に待遇されて、彼女も本当に二人に懐いているように見えた<sup>26</sup>。」というハーンの追記も読者にこの印象を強調させている。

#### 4. ＜家内の者とも＞の不在

さて、ハーンの再話の中では＜伯母＞だけではなく、＜家内の者とも＞すなわち妾たちの存在、＜弟勘右衛門＞、＜瑞光寺の僧侶＞なども同様に削除されている。ここでは、＜家内の者とも＞の不在が物語の中でどのような意味を持っているのかについて考えてみたい。

真っ先に考えられるのは、前述の通り、当時のアメリカの出版界と読者に対して、ハーンの著作が「道徳的」でなければならなかったということがあるだろう。ここで中川智視氏の論を繰り返せば、ハーンの再話作品の書き換えは、「いずれも一夫一婦制以外の結婚に関することで、読者に一夫多妻を想起させないための腐心<sup>27</sup>」だったのである。

だが、ここでさらに注目したいのは＜家内の者とも＞の不在が、単に日本の「一夫多妻制」の削除のみを意味したのではなく、＜妻＞の意義を強めているという点である。それは、＜妻＞が夫で

ある＜九兵衛＞へ直接的に真実を示唆するという働きである。この点について、読み比べてみよう。まず、原典では飛び回る蠅について、以下のよう

されは、家内の者とも、これは玉か亡魂ならんと口ずさみければ、主人もあやしき事におもひ、心ためしにせんとして、羽先を少し切て、所を隔て放しやるに、此蠅、又帰りけり……<sup>28</sup>

すなわち、真っ先に噂し始めるのは＜家内の者とも＞であり、主人はその「口ずさみ」を耳にして、不思議なことだと思い始めるのである。しかし、再話の場合は、以下のようになっている。

九兵衛の妻は不思議に思った。彼女は「玉じゃないかしら。」と言った。〔死んだ者——殊に餓鬼の境涯へ入る者——は時々、虫の姿になって戻ってくるのである。〕九兵衛は笑って答えた。「たぶん目印をつけたら分かるだろう」彼はそのハエを捕まえて、ほんの少し羽の両端をはさみで切ってから、家から非常に離れた所へ持って行って放した<sup>29</sup>。

このように、＜九兵衛＞の気づきは、妻の推測が直接彼に伝えられることで起こる。しかも、

その蠅があまりしつこく九兵衛を悩ますので、わざわざ捕まえて窓の外へ放り出した。——そのとき、決してその蠅を傷つけないようにした。なぜなら彼は仏教を篤く信じていたからである<sup>30</sup>。

とあるように、＜九兵衛＞は熱心な仏教徒であったにも関わらず、「For the dead—particularly those who pass to the stage of Gaki—sometimes return in the form of insects<sup>31</sup>. (死んだ者——殊に餓鬼の境涯へ入る者——は時々、虫の姿になって戻ってくる)」という仏教的な考え方に真っ先に気づいたのは＜妻＞の方であり、その発言に対して彼は、「笑って答え」、その後、蠅の羽を切ったり、体に色を塗りつけるなどして、疑い深くも家から遠く

放し続けるのである。

また、蠅の死に際についても注目したい。原典では、自空上人に＜九兵衛＞夫婦が呼び寄せられた瞬間、それまで飛び回っていた蠅がなぜか目の前で死んだということになっている。一方のハーンの再話では、以下のようにになっている。

「玉だと思う」と彼は言った。「玉は何かが欲しいのだ。何が欲しいのだろう。」妻は答えた。

「私は玉の貯蓄の三十匁をまだもっています。たぶん彼女はそれをお寺に払って、自分の供養をしてほしいのでしょう。玉はいつも来世を気づかっていましたから」

そのように話しているうちに、その蠅がとまっていた障子から落ちた。九兵衛が拾いあげて見たら、死んでいた<sup>32</sup>。

このように、何度も蠅に試練を与え、最終的に蠅が玉であると確信した＜九兵衛＞が次に思いを巡らすのは「玉の望み」であった。しかしそれを既に察していた＜妻＞は、また彼に諭すのである。そして彼女の言葉を聞いた瞬間、蠅ははかなくも命を絶やしてしまう。しかも、原典で「今まで飛びまはりける蠅、何としてかは、目前にて自滅しなければ、みな一同におどろき」とあるように、皆の目の前で明白に死んだのに対し、ハーンの再話では、蠅は力尽きて「それまでとまっていた障子から落ちた」のであり、＜九兵衛＞が拾い上げた時には既に命がなくなっているのである。

原典では、それまで元気に飛び回っていた蠅が、突然一まるで自分の意志とは関係がないかのように一飛ばなくなった。しかし再話では、＜九兵衛＞が玉だと確信した時には既に蠅には飛ぶだけの気力が残っておらず、辛うじてしがみついていた障子から「落ちる」ということが＜妻＞の言葉に安堵し力尽きた玉のはかなさを強調している。

このように、孝行娘である＜玉＞が、＜九兵衛＞夫妻に自らの死後を託すという色彩が強い原典に対し、ハーンの再話では二人の女性—＜玉＞と＜妻＞—が男性—＜九兵衛＞—へ真実を教唆するという形を取っていることに注目したい。これは、仏教の経典を読んでいるであろう夫（男性）より

も、目の前にある素朴で奇異なことに仏教の神髄（真理）を見出す妻（女性）の存在が描かれている物語なのである。そして、当時の読者へ向けたハーンの一つの女性像の一つであると見る事ができよう。

ここまで「亡魂蠅となる」と「蠅のはなし」を読み比べてきた。後者における主人公＜玉＞のしとやかさの加筆、そして江戸時代には極めて一般的であった大家族からの変更が意味するものは何なのだろうか。それは単なる家族の西洋化だけではなく、ハーンの求めた理想的な女性像へつながる書き換えであったと言える。そしてそれは必ずしも現実の日本女性と合致するものではなく、むしろそういった現実的なものとは一定の距離を保つ、ハーンの中に存在する「女性たるもの」の姿であったというのが妥当であろう。

#### IV. 初婚の失敗—「雉子のはなし」—

##### 1. 孝への勇気

「雉子のはなし」*Story of a Pheasant*<sup>33</sup>は、「蠅のはなし」同様『骨董』に納められた作品である。山里に住む農夫の＜妻＞が、亡くなった舅への孝を尽す物語である。そしてここでは＜妻＞と対照的な人物としてその＜夫＞が描かれ、それが彼女の孝への情熱を助長している。そして注目すべきは、孝に対する日本人の姿を、男性ではなく女性を通して西洋に伝えようとしたハーンの意図である。ハーンがセツから、そして多くの男子生徒から知り得た「孝」の概念は、再話作品の中で男性にではなく「wives（妻）」或は「women（女性）」に組み込まれているという点である。

ここで、まず物語のあらすじを述べておく。昔、ある村に若い農夫とその妻が住んでいた。ある晩妻は夢を見た。その夢に数年前に亡くなった舅が出てきて「明日自分は非常に危険な目に遭うから、できるなら助けてくれ!」と言った。翌朝、妻と夫はこの件について話をした。朝食の後、夫は畑へ行ったが妻は機織のために家に残った。やがて外で大きな騒ぎが聞こえたので驚いて出てみると、地頭が大勢の狩猟班を連れて家の付近へ近づいてきていた。そして、一羽の雉がわきの方から家の中へ飛び込んできた。そこで彼女は昨夜の夢を思い出した。その雉が舅に違いないと思った彼

女は、鳥のあとから急いで家に入って、それを捕まえて、空の米櫃の中に入れて蓋をした。しばらくして地頭の部下が何人か入って来て、雉を見なかったかと尋ねた。大胆にも彼女は否定したが、獵人の一人がその家へ鳥の飛び込むのをたしかに見たと言った。そのため、狩獵班は家の中をあちらこちらとさがしたが、米櫃の中のことは誰も気付かなかった。そのあたりをくまなく探したが、結局無駄であったので、鳥はどこかの穴からでも逃げたに違ないとあきらめて人々は引き上げた<sup>34</sup>。

以上がこの物語のあらすじである。この物語は、日本の国鳥である雉へと姿を変えた<舅>と、孝を全うしようとする<妻>、そして孝を無視し目の前にある雉を食べようとする<夫>、そして彼を罰する<地頭>で構成されている。

そして、<妻>が孝を尽すきっかけとなるのが、夢へ<舅>が現れたことである。以下、この物語の冒頭部分を見てみよう。

昔、尾州（現愛知県西部）村に若い農夫とその妻が住んでいた。家は山の間の淋しい場所にあった。ある晩妻は夢を見た。その夢に数年前に亡くなった舅が出て『明日自分は非常に危険な目に遭うから、できるなら助けてくれ！』と言った。（中略）

朝食の後、夫は畑へ行ったが妻は機織のために家に残った。やがて外の方で大きな騒ぎが聞こえたので驚いて出てみると、地頭が大勢の狩獵班を連れて家の付近へ近づいてきていた。見ているうちに一羽の雉がわきの方から家の中へ飛び込んできた。そこでふと昨夜の夢を思い出した。『もしかしたら、この鳥が舅かもしれない。助けてあげなければ』—彼女は一人で思った。それから鳥のあとから急いで家に入って—その鳥はきれいな雄鳥だった—難なくそれを捕まえて、空の米櫃の中に入れて蓋をした。

しばらくして地頭の部下が何人か入って来て、雉を見なかったかと尋ねた。大胆にも彼女は否定したが、獵人の一人がその家へ鳥の飛び込むのをたしかに見たと言った。

そのため、狩獵班は家の中をあちらこちらとさがしたが、米櫃の中のことは誰も気付かなかった。そのあたりをくまなく探したが、結局無駄であったので、鳥はどこかの穴からでも逃げたに違ないとあきらめて人々は引き上げた<sup>34</sup>。

このように、狩獵班はその地域を治めている<地頭>の率いる班であったにもかかわらず、そこから逃げてきた雉を<妻>は昨夜の夢の<舅>の化身とみなし、必死にかくまおうとする。雉を見てから、米櫃に入れ、<地頭>の部下に嘘をつく瞬間まで、「舅を助けてあげなければ」という信念を持ち、決して迷うことはない。これは、第一節でも触れたハーンの女性観、すなわち「他人のためにのみ働き、他人のためにのみ考え、他人に喜びをもたらすことだけが幸福である存在」としての女性、そして、「いつ何時でも自分の生命をなげうち、義務とあればすべてを犠牲にする心構えの備わった存在」としての女性の姿と通じている。かくまったことが発覚し罰せられることになったとしても、彼女はこの行為を間違ったものとして後悔することはないだろう。この<妻>はまさに、孝を期待通りに全うする女性として描かれていることになる。

## 2. 自分勝手なく夫>と、セツの初婚

ところで、夫婦は二人とも山の間の寂しい村で暮らす農民であり、当然学のある人々とはいろいろな面で状況が異なっていたはずである。それでもなお、<妻>は理想的な女性として描かれた。ただ、彼女の<夫>はそれとは対照的に無情で短絡的な考え方を持つ人間として描かれ、彼の存在が<妻>の孝への純粋な気持ちを引き立てている。ここからはその<夫>の行動を中心に見てみたい。

農夫が家に帰った時、妻は夫に見せるために米櫃に隠しておいた雉の話をした。

『私が捕まえたとき、少しも抵抗しなかったし、今も米櫃の中でおとなしくしています。



きっと舅様だと思います』と妻は言った。農夫は米櫃の所へ行って、蓋を取って鳥を取り出した。鳥は農夫の手に静にとまって、そこにいることに慣れているように農夫を見つめた。一方の目が盲目だった。『父の目は片方が盲目だった』農夫が云った、『右の眼だった、この鳥は右の眼が盲目だ。これは完全に父だろう。ちょうどいつも父が見つめていたような眼付で、この鳥も見ている！』……父は「おれは今、鳥だから、獵師などにやるのならいっそ、おれの体を子どもたちに食べさせてやる方がましだ」と考えたに違いない。……それで、お前の昨夜の夢の訳も分かった』と気味の悪いす笑いをうかべて妻の方に向かって、雉の首をねじった<sup>35</sup>。

このように、＜妻＞から雉の話聞かされ、実際にその鳥を見た＜夫＞は、その様子と特徴からそれが自分の父親の化身であることを半ば確信する。にもかかわらず、最終的にうす笑いをうかべながらその鳥を殺してしまう。人里離れた寂しい村に住み、彼らの子どもが登場しないことから、まだ若い夫婦であったに違いない。しかも雉（食用の肉）が入っているのが空の米櫃であったことから、彼らの食生活が非常に乏しいものであったことも窺える。その結果、＜舅＞が夢の中で「助けてくれ」と頼んだにもかかわらず、『おれは今、鳥だから、獵師などにやるのならいっそ、おれの体を子どもたちに食べさせてやる方がましだ』と考えたに違いないなどと、身勝手な解釈をし、雉を殺すのである。ここで注目しておきたいのは、この物語とセツの身の上の類似性である。

前述の如く、セツは没落士族の娘であり、ハーンと出会う前に為二という男性と結婚していた。江戸時代の武家では父の家禄を受け継ぐ長男だけが、妻を娶り子供を持つことができたため、二男以下の男性が婿養子として侍の家に迎えられことは非常に幸運なことであった。そして為二もまた、見方によれば、その幸運な男性であったのである。しかし、困窮を極めた稲垣の婿となった為二とセツとの結婚は、結局1年も続かなかった。

稲垣家の贅養子の為二は、どうにもならな

い貧窮にもはや耐え切れず、一年もたたないうちに、ついに出奔し行方し行方をくらましてしまった。セツは今や、いかんともし難い哀れな状況に置かれた。だから、やがて為二が大阪にいるということを耳にした時、なんとか旅費を工面して大阪まで出向き、彼に会って、一緒に帰ってくれるように切に頼んだのである。しかし、その必死の懇願も冷たい言葉で退けられた。為二と別れて橋の上に立ったセツは、ひと思いに川へ身を投げようという衝動に駆られた。だが、その時ふと、年をとってゆく家族一人一人の顔が頭に浮かんできたのである。自分という生活の支えを失ったら、彼らはどうなるのだろう……。セツは堅く心を決めて松江に帰った。そして、老いゆくばかりの親たちを養うために、必死に働きもし、また、どんな仕事でもした<sup>36</sup>。

このように、死をもよぎる程貧しさを極めた状況で最後まで親の顔を思い浮かべるセツとは対照的に、為二は大阪へ逃げ、再び帰ろうとはしなかった。結婚に際し少なからぬ覚悟を決めたであろうはずの彼は、無責任にもその妻と家族を置き去りにしたのである。つまり＜夫＞も為二も、家族を養う覚悟も能力も欠如し、自分の利益を優先する身勝手な行動をとるのである。

このことから、この物語に描かれる＜妻＞の涙は、大阪でのセツの絶望とつながっていると見ることができる。ハーンはこの女性に、セツの哀れな境遇と必死に家族を守ろうとする健気な姿を込めたのである。

そして、物語の後半部分で、＜妻＞は＜夫＞の悪行について＜地頭＞に涙ながらに訴え、結局孝道から外れた＜夫＞は追放となる。以下がその部分である。

この野蛮な行動を見て、妻は泣き声を上げて叫んだ。

『まあ、この極悪非道の鬼。鬼のような人の人間でなければ、こんなことができるはずがない。こんな男の妻であり続けるのなら、死んだ方がましだ』

それから草履もはずしに外に飛び出した。

夫は女が飛び出した時に袖をつかんだが、女は振切って駆け出した。駆けながら泣いた。はだしで走り続けた。町に着いて、すぐ地頭の家屋へ急いだ。それから涙とともに、獵の前夜の夢のこと、雉子を助けたいという気持ちのあまり、雉を隠したこと、それから夫が自分を嘲笑って、その雉を殺したことの一切を地頭に話した。

地頭は女にやさしい言葉をかけた。そしてこの女を労わってやるように命じ、夫は捕まえるように部下に命じた。

翌日農夫は取調べを受けた。雉を殺したことについて、事実を白状させられてから宣告を受けた。地頭は言った。

『よほどの悪人でなければ、お前がやったようなことはやれない。そんな邪悪な人間がいることは、この共同体にとって不幸である。ここに住んで、この掟を守る人々は皆、親孝行の心がけを敬う人々だ。お前のようなものを、この地域に住まわせるわけにはいかない。』

そこで農夫は、その土地から追放と決まり、もし帰って来たら、死刑になることになった。しかし地頭は、妻には土地を与えた。そして後になってよい夫を持たせた<sup>37</sup>。

このように、「孝」を尽さなかった<夫>に絶望し、嫌気が差した<妻>は<地頭>のところへ逃げ出した。雉を捉えようとしていた狩猟班のリーダーに、雉を隠した事実を自首しに行ったのである。家から<地頭>の家までの道のりは、<妻>自身の言葉通り<夫>との決別と、「死」、すなわち何らかの刑罰を意味し、そこを彼女は泣きながら裸足で駆けたのである。この姿はまさに、男子生徒がハーンに伝えた女性の姿と一致する。大谷少年が言ったように、「日本では夫よりも両親をより愛さない妻はいない」のであり、その点で<妻>の行為は日本女性の「あるべき姿」であった。

そして<地頭>もまた、その考えに賛同している。その地域において、「孝」は何よりも優先すべき当然の行為であり、その道から外れるのは共同体全体にとっての不幸であると断言し、厳しい

判決を下すのである。すなわち、ここでの<地頭>は善良で公平な人物として存在している。したがって、この物語は空の米櫃が<夫>の能力、或いは怠惰といったものに結びつき、その状況で彼が行った行為は、無能力で短絡的な人物像へつながっていく。そして、際立っているのが「孝」の欠如の象徴としての存在である。一方の<妻>の孝に対する信念と勇気、そして涙は、血縁の繋がりを越えて全うされるべき日本人の当然の行為として描かれている。さらに、この物語の背景には、それを語り聞かせたセツの境遇と、ハーン自身の父親への思いも少なからず反映されていると見てよいだろう。

#### おわりに ー日本女性と描かれた「孝」ー

これまで見てきたことから、「蠅のはなし」の<玉>も「雉子のはなし」の<妻>も、「孝」に対する揺るぎない信念を態度で示し、周囲の人間にその覚悟を示していることが分かる。そしてその女性たちには周囲を教化するための「自己犠牲的側面」をみることができるのである。しかしそれは単に社会的弱者としての女性が、美しく、はかないものとして、言い換えれば「自己を犠牲にすることでしか生きられなかった存在」としてではなく、むしろその対極、すなわち社会制度を積極的に守ることを時に危険を顧みずに行う勇気を伴って描かれている。

ただし、このような女性たちが封建社会に生きる女性たちを反映しているものであるかという点、必ずしもそうではない。実際、江戸時代に生きた女性たちについて見てみると、必ずしも彼女たちの社会的地位が低いわけではなく、経済力を持ち男性と対等の力を持ってたたかき生きていた女性も少なからずいたことはすでによく知られた事実であろう。現実社会においては女性たちが社会の枠に閉じ込められ、その中で生きざるを得なかったということでは必ずしもなかったのである。しかし、ハーンの作品の中に生きる女性は「孝」への固い信念を持ち、自己を犠牲にすることをはばからない、堅実で健気な存在であった。そこには、ハーンが日本で見たつつましくやかな女性たちの姿、あるいは自分に尽くしてくれる献身的な妻セツの影が反映されてもいるだろう。したがって、

日本において構築された「理想」が女性を以て示されたということが出来るだろう。

しかし最後に強調しておきたいのは、ハーンがこの「理想」を単なる自己満足のために書いていたわけではないということである。彼は読み手をかなり意識しながら著作を執筆していたことは既に指摘されているところである<sup>38</sup>が、当時、アメリカでは、公的な活動の場に数多くの女性が進出し、西部の州では女性に参政権が与えられ、女性が公職に立候補することさえあった<sup>39</sup>。その一方で、ヴィクトリア時代の家庭の中で母親という概念が再定義され、母性的国家という理想が育まれつつあった<sup>40</sup>。つまり、1860年代から1890年というのは、アメリカの女性たちが家庭と社会との間で揺れ動きながらも、次第に、そして着実に社会の中で権利を獲得していった時代であった。そして、それ以降はそれまでの女性の社会的地位を更に高め、かつ強固なものへしようと多くの女性が奮闘し始めるのである。

このようなアメリカの社会に向け映し出された「日本女性」の姿は、ハーンなりの道德観に基づき、読み手に新たな視点と気づきを与えようとするものであった。そしてそれは僧侶でも、化け物でも、幽霊でも、まして決して男性でもなく、必ず「女性」によって導かれなければならないものであった。それは、女性の地位が日本同様に揺れ動き、大きく変わりつつあった西洋社会へ向けた物語であったからである。

再話作品の中に生きる女性たちは、家に留まりながらも単に男性の言いなりになっている受け身の姿勢ではなく、かといって男性社会に挑戦し、女性の場所を家庭から社会へと広げようと積極的に活動するわけでもない。ただ、生かされている社会で、自ら信じていることを頑なに守り、貫くことで周囲を教化していく存在としての女性なのである。このような存在はそれを読む多くの当時の西洋人たちには理解し難いものであったかもしれない。しかし、だからこそ極東の一国に生きる、非常に異なった女性の姿の提示が、ハーンの最も意図するところであったはずである。そして、これらは、ハーン自身の母親への思慕や、妻セツ、或は男子生徒たちが示した揺るぎない「孝」への思いが彼に示した一つの信念であった。

<sup>1</sup> 小泉 (1989) 22 頁。

<sup>2</sup> 梶谷 (1968) 379 頁。

<sup>3</sup> 桑原 (1950) 66 頁。

<sup>4</sup> 長谷川 (1990) 66 頁。

<sup>5</sup> 梶谷 (1968) 379 頁。

<sup>6</sup> 長谷川 (1990) 4 頁。

<sup>7</sup> 長谷 (2014) 45 頁。

<sup>8</sup> 田部 (1929) 235 頁。

<sup>9</sup> セツが学校を下ろされた時のことについて、次のように記されている。「十一歳のセツには、貧乏の何たるかを真に理解することが出来なかった。彼女は泣きに泣いた。一週間も泣き続けたのである。女の子に学問は要らない。かえって害になると言って、セツを宥めようとした大人に、彼女は、紫式部や清少納言の例を引いて言い返し、悔しがるのであった。」 桑原 (1950) 42 頁。

<sup>10</sup> 長谷川 (1990) 53 頁。

<sup>11</sup> 坂東 (1998) 325 頁。

<sup>12</sup> 梶谷 (1968) 379 頁。

<sup>13</sup> 小泉 (1989) 299 頁。

<sup>14</sup> Hearn (1894) 460-461 頁より拙訳。

<sup>15</sup> 以下がこの部分の元となった実際の英作文の和訳である。尚、ここでの引用は、当時の中学生が書いたものであり、文法や表現方法などに誤りがある場合がある。そのため、ハーンが添削し終えた後のもののみを引用する。「世に最も怖いものは何か? (前略) (私の意見は大いに間違っているかもしれませんが) 現下日本でもっとも恐ろしいものはヨーロッパ人、特にクリスチャンだと思います。ヨーロッパ人の本質は日本のそれとは多に異なる。ヨーロッパ人は孝行については何ひとつ分かっていません。これは「親に従う」又は「子たるものの本分」(しかしこれは厳密な訳ではありません)として英語に訳されているものです。そしてこれは日本道德の五つあるうちの第一番目のものです。両親と妻が同時に水に落ちて溺れたとき、ヨーロッパ人はまず妻を救うそうです。しかし日本の道德ではこれは理に合いません。ヨーロッパ人は日本人のように自分の主人や国を離れるのに痛みを感じない。忠誠心も忠義心も大しては持ってはいない」この文章から、大谷少年は、その若さも手伝って、かなり強く西洋思想を批判し、いかに「孝」の概念を重んじるべきかを主張していることが分かる。ローゼン、西川 (2011) 35-37 頁。

<sup>16</sup> Hearn (1894) 461 頁より拙訳。

<sup>17</sup> 小泉 (1989) 22 頁。

<sup>18</sup> 小泉 (1990) 405 頁。

<sup>19</sup> 花田 (2010) 253 頁。

<sup>20</sup> 本文中に引用した「蠅のはなし」は、平川祐弘訳(「蠅のはなし」による。ただし、原文(Hearn (1902))と照らしてニュアンスのやや異なるところなどは改訳させていただいた) 小泉 (1990) 241-242 頁、Hearn (1902) 57-58 頁。

<sup>21</sup> 花田他 (2010) 253 頁。

<sup>22</sup> 小泉 (1990) 242 頁、Hearn (1902) 59 頁。

<sup>23</sup> 花田他 (2010) 254 頁。

<sup>24</sup> 花田他 (2010) 253 頁。

<sup>25</sup> 小泉 (1990) 242 頁、Hearn (1902) 59 頁。

<sup>26</sup> 小泉 (1990) 241 頁、Hearn (1902) 57 頁。



- <sup>27</sup> 中川 (2008) 341 頁。  
<sup>28</sup> 花田他 (2010) 254 頁。  
<sup>29</sup> 小泉 (1990) 243 頁、Hearn (1902) 59-60 頁。  
<sup>30</sup> 小泉 (1990) 242 頁、Hearn (1902) 59 頁。  
<sup>31</sup> 小泉 (1990) 243 頁、Hearn (1902) 59-60 頁。  
<sup>32</sup> 小泉 (1990) 243 頁、Hearn (1902) 60 頁。  
<sup>33</sup> この作品の原典は未だ明らかになっていない。  
<sup>34</sup> 本文中に引用した「雉子のはなし」は、田部隆次訳（「雉子のはなし」(小泉 (1926)) による。ただし、原文 (Hearn (1902)) と照らしてニュアンスのやや異なるところなどは改訳させていただいた」小泉 (1926) 48-49 頁、Hearn (1902) 65-66 頁。  
<sup>35</sup> 小泉 (1926) 49 頁、Hearn (1902) 66-67 頁。  
<sup>36</sup> 長谷川 (2014) 103-104 頁。  
<sup>37</sup> 小泉 (1926) 50-51 頁、Hearn (1902) 67-69 頁。  
<sup>38</sup> 中川 (2008) 350 頁。  
<sup>39</sup> エヴァンズ (1997) 229 頁。  
<sup>40</sup> エヴァンズ (1997) 229 頁。

## 参考文献

- Lafcadio Hearn, *Glimpses of unfamiliar Japan* (Volume 2), Boston & New York: Houghton, Mifflin and Company, 1894.
- Lafcadio Hearn, *Kotto : being Japanese curios, with sundry cobwebs*, New York : The Macmillan Company ; London : Macmillan & Co., Ltd. 1902.
- 小泉八雲、平川祐弘訳『怪談・奇談』（講談社、1990）。
- 小泉八雲、田部隆次訳『小泉八雲全集第七巻』（第一書房、1926）。
- 池橋達雄「ハーンとセツの結婚」(2009) 平川祐弘・牧野陽子 編『講座・小泉八雲 I 「ハーンの人と周辺」』（新曜社、2009）。
- サラ・M. エヴァンズ『アメリカの女性の歴史—自由のために生まれて』（明石書店、1997）。
- 梶谷泰之「文学者・作家・評論家 小泉八雲」島根県教育委員会編『明治百年島根の百傑』（島根県教育委員会、1968）。
- 桑原羊次郎『松江に於ける八雲の私生活』（島根新聞社、1950）。
- 小泉節子 小泉一雄『小泉八雲「思い出の記」「父『八雲』を憶う』（恒文社、1989）。
- 田部隆次『小泉八雲全集 別冊』（第一書房、1929）。
- 中川智視「ある『西洋の』保守主義者：ラフカディオ・ハーンと一九世紀のアメリカ」『言語社会 2』（一橋大学、2008）340- 353 頁。

長谷川洋二『小泉八雲の妻』（松江今井書店、1990）。

長谷川洋二『八雲の妻 小泉セツの生涯』（今井書店、2014）。

花田富二夫 他『假名草子集成〈第 46 巻〉諸国百物語・新著聞集』（東京堂出版、2010）。

坂東浩司『詳細年表ラフカディオ・ハーン』（栄潮社、1998）。

アラン・ローゼン西川 盛雄『ラフカディオ・ハーンの英作文教育』（弦書房、2011）。

## 謝辞

本稿執筆にあたり、指導教員の丁貴連先生から厚いご指導をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。また有益な御意見をくださった丁研究室の皆様にも感謝いたします。

## **Women who live for filial piety**

### **-Focus on *Story of a fly* and *Story of a pheasant* by Lafcadio Hearn-**

MINARI Sayaka

#### **Abstract**

Lafcadio Hearn rewrote many old Japanese stories after listening to their original version from his wife, Setsu. The devotional attitude of Setsu, supporting him and her family, showed him the “ideal female image”. Also he learned many Japanese ideas, for instance “filial piety,” from junior high school students in Matsue. These encounters created his own image of Japan.

The stories, *Story of a fly* and *Story of a pheasant*, have the theme of “filial piety,” which existed in Japan. Both of the main female characters lived in feudal society and tried to fulfill the “filial piety” for their deceased parents or father-in-law with the spirit of self-sacrifice.

Lafcadio Hearn came to Japan in the middle of Meiji era (1890) and the above mentioned stories were compiled in *Kotto* (1902). He sent these stories, written about women in Edo era, to 19th-century Western readers.

He wrote them not to express his ideals nor to satisfy readers’ exoticism nor Japanism, but to place the figure of women living in the Far East- who try to enlighten people by self-sacrifice. These stories depicted the appearance of women in the Far East. At the same time they gave new points of view to the Western readers.

(2014 年 10 月 31 日受理)